汐見稔幸対談

保育＋α

プラスアルファ

第83回

産前・産後の施設をやりだしてから改めて、命が生まれるすばらしさに気づいた

子どもが生まれてきたことを、みんなで喜べるような社会を目指したい

◉学校法人柿沼学園　理事長

柿沼平太郎さん

かきぬま・へいたろう

◆プロフィール

大学卒業後、26歳で埼玉県久喜市の学校法人柿沼学園の理事長に就任。現在、内閣官房「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針に関する有識者懇談会」委員、文科省「幼保小接続期の教育の質保障の方策に関するワーキンググループ」委員、内閣府「10年後の子ども・子育て支援の在り方を考える研究会」委員、久喜市総合振興計画委員、日本体育大学非常勤講師なども務める。

来る「※2025年問題」を見据えて、私たちも新しい時代の保育を考える必要に迫られています。そこで、本誌2022年3月号（no.108）の特集「園が生き残っていくためには」でご登場いただいた柿沼平太郎さんに、再びお話をうかがうことにしました。今回は「町づくり」という視点をさらに深掘りし、これまでの経緯と今後の展望などについて語っていただきました。

※2025年問題…2025年に団塊の世代の全員が75歳以上となることで日本は超高齢社会がより深刻化し、雇用・医療・福祉などの分野で起こるとされる社会的課題。

倉橋惣三の本に出会って、本気で保育をやってみたいと

汐見●柿沼さんが保育に携わるようになったのは、いつからですか？

柿沼◆今から22年前、父親の病気がきっかけで、栗橋さくら幼稚園の運営に携わるようになりました。

今は合併されて久喜市になりましたけど、当時は栗橋町という人口2万6千人ぐらいの小さな町でした。バブルが崩壊して、小学校は統廃合され、駅前のスーパーや銀行、コンビニがどんどん撤退していって、この町はこのまま終わっていくんだろうな、という感じでした。

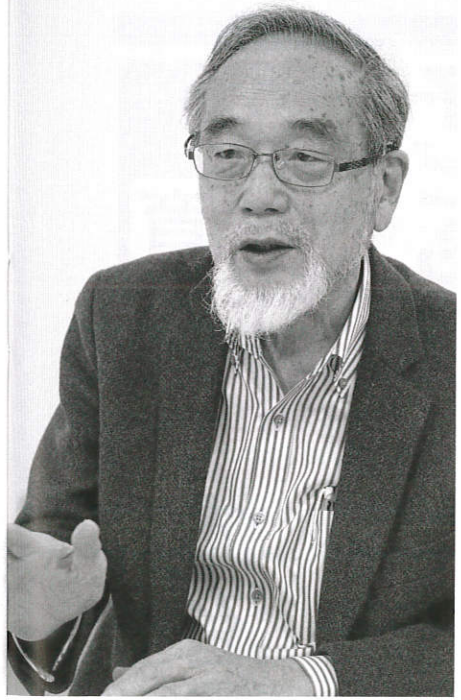
汐見●園の規模はどのくらいだったのですか？

柿沼◆200人定員だったのですが、当時は100人ぐらいになっていて。年少の入園が15人ぐらいだったので、あと3年したら50人を切ってしまうという危機的状況でした。正直、このまま廃園にしたほうがいいだろうと思っていました。

でも、周りを見たら、当時人気のある園は400人の園児を集めているところもある。人気園になれば、とりあえず200人の定員をいっぱいにできると思ったんです。

それで、空き教室を使って1～2歳児を預かる認可外保育を始めたり、英語教室をやったり、広域に送迎バスを出したりして、3年ぐらいで定員はなんとか埋まるようになりました。でも、余裕が出てきたら、なんか違うな、と思って。

そこで初めて、幼稚園教育要領や倉橋惣三先生の本を読んでみたら、自分たちのやっていることは全然違っていたのがわかりました。それからいろいろ勉強していくうちに、自分なりにこんな園がつくりたいというのができて、本腰を入れて保育をやってみようと思ったんです。



汐見稔幸（しおみ・としゆき）
●プロフィール
1947年、大阪府生まれ。東京大学名誉教授。白梅学園大学名誉学長。専門は、教育学、教育人間学、保育学。『エデュカーレ』編集長。臨床育児・保育研究会等、保育者を中心とした研究会を複数主宰。近著は『教えから学びへ　教育にとって一番大切なこと』（河出書房新社）。

子どもが一人でも増える町にしようと思った

柿沼◆保育者主導の一斉保育だったのを、子ども主体の遊び中心の保育に大きく方向転換しました。

ただやはり一番の課題は、子どもがいないエリアだったことです。広域で園児を集めていたからとりあえず定員はいっぱいになったけれど、いずれ町に子どもがいなくなる。だから、子どもが一人でも増える町にしよう、と思いました。

ちょうど自分にも子どもが生まれて、子どもが歩きだすようになると、庭がほしいな、と思うようになって。そういうときにこの町を選んでもらえればいいな、と考えたんです。

汐見●出発点から町づくりだったわけですね。

柿沼◆そのときは、町づくりという意識はまったくなかったんですけどね。空き教室でやっていた認可外保育の環境をなんとかしたいなと思っていたところに、栗橋町が久喜市と合併することになって、認定こども園になれるよ、というのを聞いて。

認定こども園になったタイミングで、0～2歳の子の居場所が必要だと思って、子育て支援センターや小さな公園をつくりました。

それから駅前に小規模保育園も新設して。広告塔みたいなイメージで、駅から見えるところに保育園があったら、子育てに優しい町に見えるかなと思ったんです。

そうしたら、なんとなく子どもが増えだした感じがあったんです。

汐見●それはすごいですね。

卒園児の居場所として駄菓子屋を

柿沼◆そのあと、近くに学童や駄菓子屋、カフェなんかをつくっていきました。

汐見●駄菓子屋っていう発想がユニークですよね。

柿沼◆一人の卒園児がきっかけでした。その子は、幼稚園の空き教室でやっていた学習教室に通っていたのですが、小学校5年生のとき、教室に来てないって大騒ぎになったんです。みんなで捜して、近所でふらふらと自転車に乗っているのを見つけて、事なきを得たんですけど。

話を聞いてみたら、学校の人間関係がうまくいってなかったようで、もう4年生ぐらいから学習教室も休みがちだったそうです。同じ園舎内の教室に通っていたのに、その子が数年間苦しんでいることに全然気づいてあげられなかった。同時に、卒園してしまうとそういう情報すら幼稚園には入ってこないんだな、と思ったんです。

それで駄菓子屋だったら、子どもがふらっと来て、あの子どう？　みたいな話が聞けるかな、と思って。たまり場みたいなイメージです。

汐見●いいアイデアですよね。カフ

ェも何かつくるきっかけがあったのですか？

柿沼◆お母さんたちって、出産や子育てでいったん社会を離れると、自由にお金も使えなくなって、たまにおしゃれして食事に行こうと思っても、このあたりだとファミレスぐらいしかない。そういうのを目にして、子ども連れでも気軽に安心して行けるようなカフェをつくってあげたらいいかな、と思ったんです。

母親の居場所をつくってみたら、そこにすら来られない人の存在に気づいた

柿沼◆でもそうやって、地域のお母さんたちの居場所がないと思って、子育て支援センターやカフェをつくってみたら、そこにすら来られないお母さんたちの存在に気づいたんです。産後うつで引きこもっているとか、双子育児でいっぱいっぱいになっているとか。

じゃあ、このお母さんたちをどうしたらいいかと考えて、「ホームスタート」という家庭訪問型の子育て支援を始めました。

そういう方たちのご家庭に行ってみると、もうネグレクト状態で何もできてないというような末期的なケースも少なからずある。その場合、行政と連携しながらやるんですけど、そうなる前に何かできないかなと思って、産前・産後のケアができるようなマタニティーハウスを始めました。

汐見●僕も見学させてもらいましたけど、一軒家を使って、誰かの家みたいなほっとできる雰囲気なんですよね。

柿沼◆僕もあそこが好きで、ときどきアイスやケーキを持って行くんですけど、お母さんたちはソファーでごろごろしてたりもするので、男性の僕が行ったら嫌だろうなと思って、玄関先でスタッフに差し入れだけ渡して帰るんです。

あるとき駅前で立ち話をしていたら、小さい子を連れた見知らぬお母さんから、「理事長先生、この間はアイスごちそうさまでした。おいしかったです」と話しかけられたんです。

そのときに初めて、この地域でお子さんを産んだお母さんって、うちの園に入園してくれる確率が高いことを改めて感じて。

にもかかわらず、このお母さんが赤ちゃんを産んだことを、私も含めて地域の人たちは誰一人喜んでいないし、このお母さんが困ったときに誰も手を差し伸べてないんだなって、気づいたんです。

このお母さんが元気に子育てして、この子が無事に大きくなっていったら、街の商店だって、パン屋さんならパンが1個多く売れるし、ドラッグストアならオムツが売れるし。なのに、その子が生まれてきたことを、社会が喜んでいない。それがもしかしたら、育てづらさとか孤立化ということにつながっているんじゃないかな、と思ったんです。

マタニティーハウス「にじいろのおうち」の室内の様子。（撮影：大枝桂子）

汐見●人の命が具体的なイメージとつながっていないんでしょうね。

柿沼◆昔は地域に「○○ちゃん、大きくなったね」みたいな言葉が結構あったと思うんです。でも今は町の人たちが、その子が生まれたことさえ知らないんじゃないかなって。

だから、みんなが子どもが生まれたことを、子どもが大きくなったことを喜べる社会になったら、子どもがもっと増えるんじゃないかなと思ったんです。

汐見●なるほど、大事な指摘ですね。

お互いの顔が見える規模のコミュニティーを

柿沼◆社会学者の宮台真司さんが、共同体の限界は3万人ぐらいだと言っているのを聞いて、なるほどと思ったんです。旧栗橋町の地区の人口が、今ちょうど2万8千人ぐらいで、毎年130～140人ぐらい子どもが生まれているんです。

フィンランドのネウボラをまねて、赤ちゃんが生まれた家庭にベビーボックスというのを配っているのですが、そのぐらいの人数ならなんとか、保健センターから地区の全家庭に行き渡るように周知してもらうことができるんですよね。

自治体からは、ほかの地区でもぜひやってほしいと言われていますが、ベビーボックスを配るだけなら予算があればできるけど、目的はそこじゃないので。

汐見●つながれないと意味がないですもんね。

柿沼◆そうなんです。つながってもケアできない。やっぱり顔が見える関係というのは、旧の町ぐらいの規模がちょうどいいんだなって。

子どもの生活圏で一つの共同体にして、そこでタウンミーティングを頻繁にやりながら、みんなが町のことを考える、みたいにできたらいいなって思っているんです。

先日、近くの小学校の校長と話をする機会があって、「こども食堂」が話題にのぼったんです。ここ栗橋地区って、決して経済的に裕福な地

域というわけではないんですけど、児童900人の小学校で、前年度の納入金の滞納がゼロだっていうんです。

汐見●それはすごいな、全国でも珍しいんじゃないですか。

柿沼◆だから今のところ、こども食堂は必要ないけれども、将来的にはあったらいいかも、という話で。

で、自分の親もそうですけど、配偶者を亡くした高齢者が、近くにたくさんいるんです。食事がやっぱり一番大事なので、こども食堂をつくるなら、それと絡めたらどうか。ただ、それなら園がやるべきことでもないのかな、という思いもあって。

でも、ちょっと待てよ、うちは保育園や学童もある。たとえば、7時ぐらいにお迎えだったりすると、真面目なお母さんほど、夕飯ぐらいわが子に手作りのものを食べさせたいって思うじゃないですか。だから、そこから買い物に行って、帰ってから急いで夕飯を作っても、お風呂に早く入りなさいとか、早く食べなさい、早く寝なさい、となって、親と楽しく過ごす時間なんてない。これって、精神的な貧困なんじゃないか、と思ったんです。

汐見●まったく同感です。

柿沼◆これだったら、園がやる意義はあるんじゃないかなって。子どもは無料にして、お母さんも安く食べられて、お迎えのあとそのままそこで夕食を食べていく。そうすれば、一緒に「おいしいね」って言いながら食べて、洗い物がないので、帰ってからゆっくりお風呂にも入れるし。

それから、食事を作らないのはダメなお母さんっていうレッテルが貼られないように、園推奨の食堂みたいにできたらいいのかなって。

汐見●いいアイデアですね。ぜひ実現してほしい。

柿沼さんが考えるのは、地域に困っている人がいれば、みんなでそれをなんとかしていこうっていう、心の通い合いみたいなものがベースにあるコミュニティーなんですよね。なにか施設をつくればいいというものではなくて、それが本当のコミュニティーなんでしょうね。

今回は町づくりのほんの一部しかご紹介できませんでしたが、ぜひまたお話を聞かせてください。今日はありがとうございました。

柿沼◆コロナ禍での行動制限がなくなり、最近ようやくおやじの会も復活したんです。会を始めたころのお父さんたちが中心になって、今でも園の運動会とかを手伝ってくれています。久しぶりに会ったら「地域のために何やります?」って話し合っていて。なんかそういうのがいいな、と思っているんです。

汐見●そういう地域の温まり具合がいいですね。

まとめ・撮影…島村枝里